

2月24日(日)

第1会場

14:30~15:30 学術委員会報告

一橋講堂

日本におけるICD植込みの実態と植込み後の電氣的ストーム：全国多施設調査から

【概要】

Mirowski博士の努力によって完成したICDが、やがて米国副大統領であったDick Cheneyにも植込まれ、任務遂行の一助となったことはよく知られている。Cheneyは致死性不整脈こそ出現していなかったものの、冠動脈バイパス術やPCIを受けており、ICDの植込みは一次予防目的であった。しかし同程度の虚血性心臓病があれば日本人でも予防的ICDを入れるべきかどうかは何とも言えない。その妥当性を吟味するためのデータが日本人の場合にはまだまだ不足している。もう一つ、頼りのICDが危なっかしく思える場面が電氣的ストームである。個々の不整脈発作を電気ショックで止めることはできても、それが短時間に何度も繰り返されたのではたまったものではない。意識のある患者にとってはもちろんのこと、たとえ意識がなくても電気ショックが重なると、その度に心筋が弱っていき、やがて除細動閾値が上昇して電気ショックに反応しなくなる可能性も危惧される。このようなICDにまつわる疑問難題を解決するには、日本人を対象とした多数例の調査が不可欠である。本セッションでは日本人へのICD/CRT-D植込みの実態を調べたJCDTRと、ICD患者における電氣的ストームの調査を試みたNIPPON Stormの二つの学会主導型調査を取り上げ、その最新情報を伝えていただく予定である。是非、耳を傾けて頂きたい。

〔座長〕相澤 義房 立川総合病院循環器内科  
三田村秀雄 立川病院循環器センター

1. ICD/CRT-D植込みの実態

山口大学大学院医学系研究科保健学系領域 ○清水 昭彦

2. NIPPON storm：登録患者背景と中間解析結果

近畿大学医学部附属病院心臓血管センター ○栗田 隆志